

## 社養協相談援助実習評価表による実習生の自己評価の試み

十文字学園女子大学 氏名 大山博幸 (06129)

片山 友子 (十文字学園女子大学 06578)、

キーワード：相談援助実習ガイドライン、相談援助実習評価表、自己評価

### 1. 研究目的

2007年の社会福祉士及び介護福祉士法の一部改正によって、2009年から社会福祉士養成指定科目は新たなカリキュラムとなり適用されることとなった。このカリキュラムではいわゆる「ソーシャルワーク実践力を有する社会福祉士養成」という目標が明示されるなか、特に実習教育に関連する科目が拡充された。これを受け、社会福祉士養成校協会では実習教育の標準化を目指すべく、2013年に「相談援助実習・実習指導ガイドライン」及びこれらに対応した「相談援助実習評価表」（以下、評価表）を作成した。この評価表は社会福祉士の国家試験受験資格取得を目指す学生が、相談援助実習で「何をどこまで学ぶのか」といった学習内容と一定の到達度を把握し可視化、評価するにおいて大きな指標となると考える。

本研究は、相談援助実習を受講する学生（以下、実習生）に対してこの評価表を実習生自身の自己評価として用い、その結果を明らかにすることで、相談援助実習の学習内容や実習指導上の課題を検討することを試みる。

### 2. 研究の視点および方法

筆者自身が担当するX女子大学の平成26年8月から9月にかけておよそ120時間の相談援助実習を行う実習生26名（3,4年生）に本調査を実施した。なおこの実習生たちは、平成25年2月から3月にかけて各々60時間以上の実習を終了している。実習事前事後にそれぞれ実習生自身が自己評価として記入できるように社養協相談援助実習評価表の各チェック項目における評価基準の表現を修正した評価表を作成した（以下自己評価表）。実習事前の自己評価表では、教示文を「あなたの実習における、現時点での学習の達成状況に基づいて、あてはまる選択肢のうち、それぞれ一つずつ選び、その番号もしくは記号を○で囲んでください」とし、評価基準を「4：十分達成できると思う、3：だいたい達成できると思う、2：ある程度達成できると思う、1：あまり達成できないと思う、NA：質問項目の意味がわからない」とした。また実習事後の自己評価表においては、上記と同様の教示文で、評価基準を「4：十分達成できた、3：だいたい達成できた、2：ある程度達成できた、1：あまり達成できなかった、NA：やっていない」とした。なお評価基準はリッカートスケールとみなしNAを0点として集計、解析を行った。実習事前に、対象となる実習生に対して上記実習事前の自己評価表の項目及び実習先の種別を問う質問と学生の年齢及び氏名を問う質問によって構成された質問紙に記入を求め、実習終了後に、実習事後の自己評価表

及び実習指導者に関する質問9項目（4：あてはまる、3：ややあてはまる、2：あまりあてはまらない、1：あてはまらない、NA:実習指導者だったのかわからないの5件法）及び学生の氏名を問う質問によって構成された質問紙の記入を求めた。実習配属先は児童養護施設、特別養護老人ホーム、地域包括支援センター、障害者支援施設、社会福祉協議会、福祉事務所、児童相談所等であった。26名のうち分析に有効となる21名（20-22歳）のデータを対象とした（有効回答率80.8%）。

### 3. 倫理的配慮

実施前に学生に本研究の調査の依頼をした。その際、氏名を記入するのはデータの対応関係を知るためであって本授業の成績評価とは関連のないこと、質問紙調査票の記入を拒否することができることを文章にて説明し、了解を得た。

### 4. 研究結果

【表1】は実習後の大項目の得点結果である。平均値においては、「ア円滑な人間関係の形成」、「イ利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成」はやや高い値であるのに対し、「エ利用者やその関係者への権利擁護及び支援とその評価」「キ経営やサービス管理管理運営の実際」「ク地域社会の一部であることと理解と地域社会の働きかけに関する理解」はやや低い値であった。

表1 実習後の大項目の得点結果（表内大項目はシラバスの記述を筆者が圧縮して記述）

大項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
ア円滑な人間関係の形成	21	1.60	3.80	2.63	0.64
イ利用者理解とその需要の把握及び支援計画の作成	21	0.70	3.30	2.23	0.79
ウ利用者やその関係者との援助関係の形成	21	1.17	3.67	2.21	0.77
エ利用者やその関係者への権利擁護及び支援とその評価	21	0.00	2.40	1.36	0.58
オ多職種連携をはじめとする支援におけるチームアプローチの実際	21	1.33	4.00	2.15	0.68
カ職業倫理、組織人としての役割と責任の理解	21	0.50	4.00	1.94	0.75
キ経営やサービスの管理運営の実際	21	0.80	2.80	1.76	0.52
ク地域社会の一部であることと理解と地域社会の働きかけに関する理解	21	0.80	2.70	1.78	0.57

また、実習後の小項目51項目の度数分布をまとめた。各項目において21名中一人以上「NA:やっていない」との回答があった小項目は18項目（35.5%）であった。またその中で特に度数が5以上（全体の23.8%）の項目は6項目あった。実習前と後では自己評価表の評定名称が異なるため対応関係とするには問題があるが、あえて自己評価得点の総合計を実習前後で比較したところ、自己評価は実習後優位に上昇していた( $t(20)=2.55, P<.05$ )。

### 5. 考察

実習生による自己評価のみの結果ではあるが、本事例研究の結果から相談援助実習でなされた学習内容とその達成度を確認することができた。しかしながら実習事後の小項目において「やっていない」という回答が一定程度あった項目についてどうとらえるか、大項目として各領域における学習内容の達成度の差異について、実習配属先種別との対応あるいは担当教員の実習指導の方法も含め検討することが課題である。